セミナー講演

火葬場の跡地考

Some Thoughts on Former Site of Crematory

Katusuke ASAKA

浅香勝輔 (元)日本大学理工学部教授・正会員

まず、火葬場と墓地との関係であるが、墓地と火葬場は根本的に異った面があると考え。墓地は静寂さ、故人を偲ぶといったポエムがあるが、火葬場は800度Cから1,000度Cの熱で焼く生々しい火葬作業があり、皆さん眼を背むけてしまう側面があると思う。

実は、火葬場を研究していると、現存する火葬場とこれからつくる火葬場について、様々な人が研究したり、設計はこうあるべきだと語ったりしているが、あまりにも現実的になり過ぎている気がする。

私は歴史を研究しており、過去に所在した火葬場が新しく火葬場にとって変わり、その跡地は現在どうなっているのか。その価値を探ったり、また、不動産としての側面からどう動いているのかなど、将来の対策に役立てることが大切だと考え、火葬場跡地の研究を出発させたわけである。

研究方法として、とにかく、いまの火葬場研究は、一部を除いて理念の問題や火葬場を論ずる想像力について非常に貧弱な点がある。それは、歴史の対象の実感が無いからだ、私は思う。

そこで、歴史を少しばかり遡ってみると火葬場が位置づけられるのではないのかと考え、全国市町村の主なものを選んで、火葬場の跡地を研究対象として事例研究の形を採った。また、火葬場の研究はいいのだが、跡地の古傷を掘り起すのはどんなものかと言われるけれども、決して古傷を掘

り起すのではなく、事実の正確さを記するほかに他意はないのであり、現在の火葬場という都市施設の歴史をみていくとき、それらを放置していたら、新しい都市計画は立てられないと考えるからだ。

で、これから紹介する「追跡研究・火葬場の跡地」は、民営火葬場であった所も含まれる。ただ、民営火葬場であった所は、非常に閃鎖的な経営形態、施設状態を継承してきた所が多く、また、資料不足であり、もし、あったとしても資料を開示してくれない場合が多い。こういう見地からも、地元の高齢者などから、早いうちに、ヒアリングをしておく必要があると思った。

それに、過去の火葬場の所在を調べる場合に、ひとつの参考となるのが、都道府県あるいは政令指定都市の資料である。公文書において、開業、休廃止、免許施行など、許可されたものについて、どの地域かは、すぐに知ることは出来る。しかし、許可申請をしても、知事が不適当とみなして却下した計画や、モグリの火葬場計画などは、一般に公文書には記載されておらず、その実情に迫る資料はないとみていいのである。

さて、事例研究に移るが、神奈川県藤沢市に、慶応大学湘南藤沢キャンパスが10数年前に建設された。ここは日本一美しいキャンパスといわれているが、そのすぐ裏側に新しい火葬場が出現したのである。場所は藤沢市に隣接する茅ヶ崎市芹沢

地区にある。新しい火葬場から湘南藤沢キャンパスが見え、キャンパスからは火葬場が見えるといった光景である。茅ヶ崎市には煙突のそびえる古い火葬場があったが、それにかわって、藤沢市と茅ヶ崎市との市境に新しい火葬場がお目見えしたというわけである。

現在、火葬場は変貌しつつある。これは和歌山県の事例であるが、大正12年に建設された古い火葬場と新しい火葬場とが並列して建っている。古いほうは間も無く取り壊されるが、新旧火葬場が現在、一緒に見られる。

日本で最も壮絶な火葬場もあげられる。富山県高岡市にあり、奈良の寺院の五重塔風の所から白い煙が出る様は、見ていて気味が悪い。この火葬場は、大正時代からあるレンガ積みの火葬炉を改築したものだという。

火葬場跡地を研究していて、いろいろ考えさせられる事例に突き当たるが、これはその一例である。ハンセン病に関連したもので、小川正子さんという女性がいる。この女性は、山梨県東山梨郡春日居町の出身で、昭和18年にハンセン病ではなく結核で故郷に帰り亡くなっている。その後、春日居町の教育委員会は彼女を名誉町民として讃える一方、同町郷土館では「アルバムで綴る救ライの母・小川正子の生涯」という書物を発行している。同書によると、小川正子の遺体は遺言通り、甲斐住吉の火葬場でダビにふされたが“その日の空はあくまでも青く澄み、甲府の市街地に近い甲斐住吉の火葬場の周囲の田圃には、レンゲの花が一面に咲いて……”という記述があり、私はこれを読んで実際に確かめたくなり、現地へ飛んだのである。

甲斐住吉は甲府からJR身延線で4駅目にある。甲斐住吉の火葬場は大正15年に建ったものであるが、その跡地に行ってみて、私は愕然とし、約半年間にわたって通い詰め、調査した。

その結果、火葬場の炉の跡に一戸建て住宅が建っているのである。おそらく不動産業者が更地にしてしまい、火葬炉があったこと偽って売却してしまったと考えられる。近隣の住民に聞くと、ここに火葬棟があり、あそこに火葬炉（現在は住宅）があったことが実証出来た。

こういう事例に遭遇し、火葬場跡地の実地研究は粗末に出来ないと考え、さらに火葬場跡地の調査を進めることにした。

現在、民営火葬場の建設は許可されないが、戦前は民営火葬場が多かった。

これは千葉市の事例。現在、千葉市営火葬場は若葉区桜木町に所在する。昔はJR蘇我駅近くの寒川地区にあった。この周辺は埋立地で地盤が軟弱なため墓所にしにくい所であったので古くから火葬が盛んであったという。作家の杉本苑子が「伯爵夫人の肖像」という小説を書いているが、この中に千葉・寒川の火葬場のことが記されている。この火葬場は後に廃止されたが、現在、千葉市の都市計画では第一種住居地域になっている。

もうひとつ千葉市の事例をあげてみる。大網街道、千葉へ大網線に面した、中央区仁戸名町に千葉社会保険病院と国立療養所千葉病院がある。ここは戦争中は、傷い軍人千葉療所と千葉県立結核療養所であったところ。胸部疾患は伝染病予防法により、死亡した場合は、遺体は茶毘に付さなければならない。当時は、病院内に火葬場がなかったので、近くの雑木林の中に火葬場を設置した。終戦後、病院経営が変わるとともに、火葬場は放置されてしまった。それを近くの仁守寺が引き取り、火葬場経営を行ったがダメになり、民間に売ってしまった。それがいつの間にか住宅地になっている。おそらく、不動産業者が二束三文で買って高く売りつけたに違いないのだ。

民営火葬場が公営火葬場に代わった事例を次にとりあげる。

ひとつは、埼玉県の最近さいたま市になった旧浦和の例。大正3年印刷された「浦和町明細全図」の復刻版がここにある。それをみると、現在の北浦和公園の所に火葬場の明示がある。伝染病病院のそばに火葬場があったのだが、埼玉県では、伝染病病院→火葬場→墓地という3点セットが多くみられる。

民間が経営していた北浦和公園にあった火葬場は大正9年に操業、その後、現在の駒場2丁目に移転、昭和22年4月に浦和市に移管され浦和市営火葬場として業務を続けたが、建物が老朽化したため、昭和55年12月に下大久保にある現在の市営斎場に移転した。駒場にあった火葬場は廃止され、現在はプラネタリウムなどがある「さいたま市立青少年宇宙科学館」になっている。

民間から公営火葬場に転換した事例で、もうひとつ広島市の場合をあげてみる。

広島市で中心となる火葬場は、広島駅新幹線ホームの北側の山の上にある永安館であるが、ここが操業したのが昭和37年。それ以前は、明治36年に出来た向西館が主体。広島の人たちは向西館と聞くと身震いがするというが、この向西館は民営の火葬場であった。昭和20年になって向西館は解散、広島市がその施設を買収、市営向西館火葬場となったが原爆に遭遇、被爆した建物を補修しながら稼働していたが、老朽化が激しくなり、また、市街地の真ん中に所在するため市民からの廃止要望が強かったために、前記の広島市永安館に移転したのである。向西館の跡地は西区中広町1丁目にあって、現在は、消防署の支署や高層集合住宅が建っている。

宮城県仙台市では、同市の西方の広大な墓地公園内に火葬施設がある。民営の火葬場としては、JR東北在来線の東側、若林区新寺4丁目にあった。ここは、昭和34年に土地区画整理事業に着手するまでは、田圃道に多くの寺院が点在し、附近

一帯は“新寺小路”と呼ばれていた。その寺院の中の曹洞宗妙心院、浄土宗愚鈍院の間の路地の終りに炉数6基の民営の火葬場があった。結局この火葬場は、昭和34年の都市計画決定前後に廃止され、跡地はそのまま新寺4丁目公園となり、公衆トイレのあるところが、昔の火葬炉だったといわれている。

名古屋市の民営火葬場をあたってみる。近鉄に乗って1駅目の米野に民営の火葬場が昭和40年まで経営、野立火葬場が昭和54年まで、熱田区千代田町にあった。

また、名古屋には火葬炉46基が並ぶ壮大な八事火葬場がある。もし、この火葬場の災害などに遭ったらどうなるのか、心配の面もある。火葬場2カ所があげられるが、いずれ集落所有の小規模なものである。

最近、民営火葬場が廃止になった事例が、大阪市生野区中川西にみられる。鶴橋斎場がそれで、平成12年1月に廃止となった。この鶴橋斎場は、大阪府東成郡鶴橋町とその周辺に散在していた簡易火葬場を1カ所にまとめて大正15年4月に操業した。いかにも火葬場といったグロテスクな建物である。実は、1カ月ほど前、現地へ行ったら、そのまま建物は残っていた。何に使用するのかと聞くと、セレモニーホールにするとのことであった。

さて、公営火葬場と跡地の近代化の問題点を考えてみる。

古い施設の火葬場を近代的施設にするのを契機に、火葬場のイメージを一新させるため新しい場所へ移転させる都市がかなりみられる。これらの都市は市域に山林などを持つ余裕のある都市だと思う。しかし、市域に余裕のない都市は、都市計画法や建築基準法の厳しい制約を受けながら、従来からの同一の場所で近代的な火葬場へ改善せざるを得ないケースが多い。公営の火葬場の場合、

この二つのケースに分かれることがかなりある。

ところで、火葬場の施設の移転や改善の波は、昭和40年代後半に到来した。再燃焼炉つき火葬炉が日本で発明され、実用化され、煙が出ない、異臭がしない施設が出現した。これは急激な都市化により火葬人口が増えた時期と期をいつにしている。

このようなことから、最近素晴らしい火葬場が出来ている。その中で是非紹介したいのが大阪府箕面市にある火葬場である。ここには、火葬場と図書館が並列して建っている。同じタイル張りであり、設計者も施工者も同じである。それに炉の裏まで見学出来る。テラスがあり、ガラスが入っている。ここは新しい形式の火葬場だと思う。

火葬場が近代化していく過程でモータリゼーションというのも見逃せない。火葬場への会葬者は車に乗ってくる。昔のような野辺の送りのものとはなくなっている。そこで駐車スペースが必要になる。それに対応できない火葬場はやりにくくなることもある。また、一つの都市に1カ所の火葬場は必要ないということから、新しいタイプの広域火葬場が誕生する蔭で、火葬場の跡地が多数出現するのではないかと思う。跡地が出た場合、公営火葬場の跡地は不動産業者の手が入らないため更地になる所が多い。これに対して、民営火葬場の跡地の場合は逆に不動産業者が入りやすい。

事例の主なものをあたってみる。名古屋市は大きな火葬場をつくるため40数ヶ所の更地が出た。岩手県釜石市は公営駐車場にすると市の担当者は言っていたが、荒地と化した。香川県丸亀市の跡地も荒地のまま。最もひどいのが福島県郡山市。富山県中新川郡の上市町。一方、良い例として、跡地を公園、市民のための広場にしているほか、慰霊碑、鎮魂の碑などを建てている。岩手県大船渡市、宮城県気仙沼市、山形県長井市、滋賀県大津市、滋賀県敦賀市、京都市、愛媛県新居浜市、

静岡県田方郡菰山町などである。

ところで、京都市営火葬場の場合、碑のそばに建物が建っているが、これは非常用の火葬場である。火葬場は8基の炉があり、いつでも燃やせる体制になっている。

また、大津市では、大正末期からあった古い木造の火葬場を解体し、平坦となった所に碑を建てている。

一方、火葬場跡地に公共施設を建てている例もある。先述した、さいたま市の青少年宇宙科学館、仙台市の北山センター、市川市の勤労福祉会館などだ。

最後に、福岡県の北九州市と福岡市の事例をとりあげる。

現在、北九州市には火葬場が2カ所ある。昭和38年2月に、門司、小倉、若松、八幡、戸幡の5市が合併し、同年5月に政令指定都市になった。北九州市が誕生すると、市当局は、東部斎場、西部斎場の2カ所を建設し操業。同時に旧市にあった火葬場をすべて廃止した。

福岡市は昭和47年に政令指定都市に移行。昭和54年に福岡市葬祭場が完成した。福岡市は細かく町村などが合併してきた歴史があり、そのたびに小規模の火葬場を統合している。

九州大学医学部に火葬場があった。実は、国立の火葬場は、ハンセン病の火葬場を除いて九州大学医学部しかない。同火葬場は昭和25年に建てられ42年まで使われていたが、現在は、建物だけが残っており、近く取り壊されるという。

ここで、火葬場跡地と都市計画の関係をみてみると、全国59カ所のうち、火葬場跡地は、都市計画区域以外は3カ所しかない。ほかはすべて都市計画区域内に入る。第1種住居地域が最も多く15カ所、第1種中高層住居専用地域が10カ所、第1種低層住居専用地域が6カ所となっている。このほか、市街化調整区域が8カ所、準工業地域が7

カ所、近隣商業地域が2カ所、商業地域はゼロである。

このように、火葬場跡地は社会変動と大いに関係があるだろうが、火葬場の常識に対する批評、反省がでており、これまでも、火葬場の枠組を越える動きが、都市問題、地域問題なかから見出すことが出来ると思う。

そこで、火葬場跡地をどうするかの問題であるけれども、まず、周辺地域のニーズに応える。もうひとつは、資本を投下して何か別の世界をつくる。それから、従来の経営観念と違った独自のプランを立てることだ。

火葬場は、高温を使って遺体を骨にする凄まじい作業をする所だ。したがって、火葬場跡地はどうしても、人々にとってダークなイメージに映りかねない。その後向きの感情が、例えば、火葬場跡地調査を困難にしているかもしれない。

何故、火葬場が廃止されたのか。廃止された土地は民間の土地か、公有地か。その跡地がその地域住民にとってどのような影響を残したかなど、様々な要因をみる必要があると思う。

私は火葬場を研究していて、火葬場に関する文献に関心を持っているので、今後、研究課題にし

たい。また、世田谷の千歳烏山の例のように関東大震災のときに、東京の下町の寺院がそっくり移転して行った場所についての学問的研究をしなければならない。さらに、旧軍隊が、祖先伝来の墓地を動かせという命令を出したという。旧軍の横暴と墓地との関係を研究しなければならないと思っている。

それに墓地が移動したとき、墓地跡地を専門に研究している人はいないのではないのか。墓地は火葬場に比べとらえにくいのではないのか。あまりにもいろいろな種類の墓地があるためではないのか。そのためには折口民族学、柳田民俗学からの接近が必要だと思う。

私は全国各地の墓地を回っていて、戦死者の墓碑をみると、非常に胸が痛む。墓地の研究は火葬場以上に大変だと思っている。

〔付記〕 登載した2つの講演は、「墓地を中心とした生活施設のあり方」をテーマとして研究活動している分科会（代表 丸山英気・千葉大学教授）のメンバーである渡辺俊一、浅香勝輔両氏が、事業企画委員会主宰の7月に開催された『賛助会員定期セミナー』において講演された内容を中間報告の形として抄録にまとめたものです。